

内藤家旧蔵の能・狂言面について  
く伝来過程をめぐる一考察く

延岡市内藤記念館

学芸員

増  
田  
豪

# 目次

はじめに

一 内藤記念館所蔵の能・狂言面

(一) 能道具台帳との比較検討

(二) 種類にみる特徴

(三) 面打にみる特徴

二 延岡における能楽

(一) 延岡における能楽の始まり

(二) 今山八幡宮・神明宮神事能の成立

(三) 引き継がれる神事能

三 神事能における能道具

おわりに

## はじめに

現在、延岡市内藤記念館には、旧延岡藩主内藤家より平成五年二月に寄贈された、能面六十六面、狂言面六面が存在する。こうした旧大名家所蔵とされる能面については、伊予松平家の百九十四面、備前池田家の百七十面、大聖寺前田家の百六十五面、尾張徳川家の百五十六面、土佐山内家の百四十九面などが知られている。しかし、明治期以降の財政上の影響などから散逸したのも多く、全国的にみると、このようにまとまって伝えられている事例は、決して多いものとは言えない。

これまで、これらの大名家にまつわる能面については、大名家の表道具としての側面から、個々の能面の作者や形状といった、美術工芸品としての価値についての考察が加えられてきた。しかしながら、能面の集積・伝来過程については、そうした内容を跡付ける文書資料そのものが伝わっている大名家が少ないこともあり、十分な考察が加えられてきたとは言いがたい。能は「仮面劇である」と言われる程、能面は能にとつて重要な役割を占めるものであり、江戸期における能楽が、式楽としての性格を有する以上、まとまった形での能面群の伝存状況には、各大名家の能楽に対する姿勢が少なからず反映されていると考えるべきであろう。また、このような能面の集積・伝来過程を検討することは、江戸期の能楽のあり方を考える上でも重要であると考える。

そこで本稿では、旧延岡藩主内藤家より寄贈された能面群について、その資料群としての特徴についての分析を行い、その集積・伝来過程について考察してみたい。

なお「能楽」の語は、明治十四年の「能楽社」設立と共に造られた語句であり、江戸期においては猿楽と記すべきところであるが、本稿においては一般的な名称として能楽を使用した。

## 一 内藤記念館所蔵の能・狂言面

### (一) 能道具台帳との比較検討

内藤家旧蔵の能・狂言面の調査が本格的に行なわれたのは、中村保雄氏による平成六年(一九九四)の調査であるが、中村氏は「面扇鬘腰帯紐露小道具」と「御能装束買料帳」との比較を通じて、その内容が一致しないことを指摘している。実際、「面扇鬘腰帯紐露小道具」では、「面之部」として「桐白木十二引出箆」の引出の収納別に四十面を、「次物」として十七面をそれぞれ記すが、その中で、面の制作者や面裏の状況を記した二十五面において、現在、内藤家旧蔵とされる能・狂言面七十二面と一致するものは一面も無い。また、名称しか記していない残りの三十二面においても、面裏の状況を記していない可能性を含め、二十三面の名称が一致する程度に過ぎず、「面扇鬘腰帯紐露小道具」に記された能面群と、現存する能面群が同一のものである可能性は極めて低い。

「面扇鬘腰帯紐露小道具」の作成年月日は不詳であるが、明治三年(一八七〇)七月から同十九年までの能装束等の購入台帳である「御能装束買料帳」において、面の購入記録としては最後となる、同十一年の「泥小飛手」と「猩々」を、その制作者名を同じく記載している。こうしたことを踏まえると、少なくとも同十一年以降に作成された台帳であると考えられるが、「表上」は、この二つの史料の他に、昭和七年十一月の段階で、延岡の内藤邸において保管されていた能道具類の台帳として作成された「能楽具目録」を加え、この三つの史料に見える面の比較を行なったものである。

「能楽具目録」には、面の名称のみしか記されていないため、「面扇鬘腰帯紐露小道具」や「御能装束買料帳」に記されている面と一致するものであるかどうかを断定することは難しい。しかしながら、総数五十面の内、「名無し」とする一面を除くと、「面扇鬘腰帯紐露小道具」に記された面の名称とすべて一致し、まず間



【表1】 台帳間に見る能面の比較

	系統	御能装束買料帳		面・扇・髷帯・腰帶・紐露・小道具		能楽具目録	
		名称	面裏	名称	面裏	名称	名称
1	鬼神系			悪尉		悪尉	
2	鬼神系	大飛手		大飛手	洞雲打・庸隆(花押)	大飛手	
3	鬼神系	大飛手	(抹消)				
4	鬼神系			大癒見		大癒見	
5	鬼神系			黒髭		黒髭	
6	鬼神系			黒髭	出目	黒髭	
7	鬼神系	小飛手		小飛手	出目栄満	小飛手	
8	鬼神系			小飛手	甫閑打・朱ニテ	小飛手	
9	鬼神系	小癒見	(焼印)「出目庸吉」 長雲庸吉作	小癒見	長雲庸吉作	小癒見	
10	鬼神系	小癒見	美□(花押)	小癒見			
11	鬼神系	シカミ	廣厚(花押)	シカミ		顰	
12	鬼神系			長靈癒見		長靈癒見	
13	鬼神系	天神	廣厚(花押)	天神		天神	
14	鬼神系	泥小飛手	赤鶴	泥小飛手	赤鶴	泥小飛手	
15	尉系	三光		三光		三光	
16	尉系			三光	カハリ形	三光	
17	尉系			石王尉	出目栄満	石王尉	
18	尉系			小尉	近江	小尉	
19	尉系			茗荷尉	出目	茗荷尉	
20	尉系			靈尉	大永□八十五酒沐	靈尉	
21	尉系			笑尉		笑尉	
22	男系			喝食	天下一若狭守	喝食	
23	男系			邯鄲男		邯鄲男	
24	男系	十 六		十 六		十 六	
25	男系	猩 々	河内	猩 々	河内	猩 々	
26	男系			猩 々			
27	男系			丸将			
28	男系			中将		中 将	
29	男系			中将		中 将	
30	男系	童 子		童 子		童 子	
31	男系			童 子		童 子	
32	男系	平 太		平 太	近江打・能静(花押)	平 太	
33	男系	若 男	(焼印)「出目元休」	若 男		若 男	
34	男系			若 男		若 男	
35	女系			姥		姥	
36	女系	小 面		小 面		小 面	
37	女系			小 面	□古	小 面	
38	女系	小 面	東海外史/喜多健忘斎/大和打/七十歳□(花押)	小 面	大和打/東海外史/喜多健忘斎/七十歳□(花押)	小 面	
39	女系			曲 見	出目長命正朝(花押)	曲 見	
40	女系			曲 見		曲 見	
41	女系	増 女		増	近江	増 女	
42	女系			増	近江	増	
43	女系	深 井		深 井	河内	深 井	
44	女系	孫次郎		孫次郎			
45	女系	孫次郎		孫次郎	洞白作・朱ニテ		
46	靈系	真 角		真 角		真 角	
47	靈系			真 角		真 角	
48	靈系	泥 眼		泥 眼	河内	泥 眼	
49	靈系	泥 眼	有吉長門正 廣厚(花押)	泥 眼		泥 眼	
50	靈系	生 成		生 成	出目満昆		
51	靈系			錦木男		錦木男	
52	靈系	橋 姫		橋 姫			
53	靈系			般 若		般 若	
54	靈系			三日月	観世大夫滋章(花押)・袋二徳若作(花押)	三日月	
55	靈系			瘦 男		瘦 男	
56	靈系			山 姥		山 姥	
57	狂言			大 祖		曾祖父	
58	狂言			福 神			
59	狂言					名無シ	
合計		25面		57面		50面	

違いなく、同じ能面群に対して作成された台帳と考えるべきであろう。また「御能装束買料帳」の記述により、これらの能面群が、藩政時代から内藤家に伝えられて来た、大名道具としての能面だけで構成されているのではなく、明治期に入ってから、新たに蒐集された面を含む能面群であることがわかる。明治期の内藤家による能道具類の蒐集は、自らも数多くの能を舞った、内藤家十五代当主政義の影響として指摘されているところであるが、「御能装束買料帳」

に見ることのできない、三十二面の来歴は不詳であり、藩政時代から内藤家が所有していた面である可能性も否定できない。しかしながら、これらの台帳上に見える能面群と、内藤記念館所蔵の能面群が一致しないことは先に指摘したところであり、これらの台帳が作成された当時において、同時に存在していたかは不詳であるが、明らかに二つの能面群が、内藤家旧蔵として存在することになる。